

# 派遣を終えて

## 平和祈念文集

### 【平成28年度長崎派遣中学生】

長崎派遣を終えた後、派遣中学生は感想文を作成しました。

テーマは、「長崎派遣を通して感じたこと、考えたこと」で、派遣を通して感じたこと、平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で述べられています。

## 核兵器廃絶と平和につながる「想像力」



我孫子中学校 2年 原 直輝

私は、我孫子市平和事業の長崎派遣中学生として、原子爆弾の被害にあった長崎県を訪れ、原爆の悲惨さ、平和の尊さを学んできました。

私は、長崎へ行く前に、資料集や新聞等で長崎に落とされた原子爆弾の事や、その被害状況、被爆した方々の書物や本を読んでいきました。

しかし、実際に長崎の地を訪れ、自分の目と、心で感じた原子爆弾による被害と悲惨さは、想像以上だった事に、衝撃を受けました。

1日目の活動は、語り部の方から、被爆体験について、話を聞きました。語り部の永野悦子さんは、つらかった体験を私たちに丁寧に語って下さいました。1945年8月9日、午前11時2分、長崎に原子爆弾が落とされました。当時16才の永野さんは、その時、学徒動員で、三菱工場で働いていたそうです。「ピカッドン」という音で、一瞬の間に町は焼け野原となり、苦しむ人であふれていたそうです。「ピカッ」という強い閃光は目が失明するのではないかと思う程だったそうです。家族と会うことは出来ましたが、原爆による大火傷で、弟を亡くし、お母さんと妹も、原爆による後遺症で亡くなったそうです。話を下さっている間、永野さんは、とてもつらそうで、さみしそうな顔をする時がありました。71年たっても、深い悲しみは消える事がないのだと思いました。原爆は大切な家族との悲しい別れと憎しみを生む、二度と使ってはいけない物だと感じました。

フィールドワークでは3班に分かれて行動しました。私は、平和公園コースを回りました。原爆による、爆風で大きくずれた浦上天主堂の柱は、大きくて重たい物なのに、これだけずれているという事は、いかに爆風の威力が強かったのか、その爆風を人が受けたと思うと、恐ろしい気持ちになりました。

平和の泉は、被爆した人々が水を求めて、苦しんで亡くなっていった人々を

なぐさめるために建てられたそうです。原爆が落とされた後、人々は火傷や熱線で、熱くて熱くて、少しでも体を冷やしたい、のどがかわいて、水が飲みたいと思ったのだと思います。水を求めて亡くなっていった人々をなぐさめるために、式典では、献水も行われていました。

2日目は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。市電に乗って会場へ行く間、長崎の町は、祈りに包まれているように感じました。会場の前の道にはたくさんの千羽鶴や、当時の様子をとった写真が並べられていました。私たちも我孫子市代表として、千羽鶴を奉納しました。式典で田上市長は、「事実を知る事、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。」と言っていました。私はこの言葉がとても心に残りました。実際に目で見たり、手で触れたりしてみなければ事実を知ることは出来ないと思います。世界各国が原爆について知り、核兵器の無い世界の実現に、つなげてほしいと思いました。

青少年ピースフォーラムの意見交換会では、レクを行い、各地から集まった仲間と、友情を深め、被爆者の方の気持ち、紛争下におかれている子供達の気持ちについて考えました。被爆者の方の気持ちでは語り部の方の話をもとに、それぞれの場面でどう思ったかを、自分だったらこの時どう思うだろうか、「想像」し、考えました。紛争下におかれている子供達の気持ちでは、1枚の写真から、状況・気持ち、2つの視点から物事を考え、付箋に書いて貼り、他の人の意見も交えて、自分の考えを深めることが出来ました。最後には、ハトの形をした紙に自分の平和への思いを書いて、みんなで1つの世界地図をつくりました。こういった小さな活動が平和への第一歩につながる大切な活動だと感じました。

私は長崎派遣を終えて、核兵器廃絶と平和に対する思いが一層深まりました。田上市長は平和宣言の中で、「英知」という言葉を何度も使っていました。私はこの「英知」とは、想像する力なのではないかと思いました。広島の子ども代表の宣言中にも「被爆者の思いや、被爆の事実を自らの体験のように想像する」と言っていました。長崎や広島へ行き、原爆の惨劇を目の当たりにした時、自分だったらどうしたらいいだろうか、こんな思いはしたくない！！と誰もが思うはずです。「英知」を集結するという事は、各国の想像力を働かせて下さい

という意味だと思います。その想像力が少ないから戦争を起こしたり、核兵器を使用することができるのだと思います。

私は、長崎で学んできた事を今後に生かし、自分の身の回りの小さな事から一歩ずつ、平和な未来が築けるようにしていきたいと思います。

## 長崎派遣で感じたこと



我孫子中学校 2年 額賀 美羽

私は、今回の長崎派遣を通して、平和の尊さと、戦争の恐ろしさを改めて実感しました。これは、私が長崎へ行く前にも思っていたことですが、今回実際に行くことにより言葉の重さと、感じ方が変わりました。

長崎に着いてすぐ、私は、被爆者の永野悦子さんのお話を聞きました。当時の様子は聞いているだけでも胸が苦しくなり、耳をふさぎたいと思うくらいに衝撃的でした。今の平和な日本で起きたことだとは思えないくらい、71年前、すごいことが起きたのだと思います。とつぜんの出来事で、何が起こったのかもわからず、道ばたには、人が倒れて死んでいる。そんな状況の中で永野さんは、家族を探し回りました。私だったら、きっと気絶してしまうだろうと思います。本当に被爆し、戦争を体験したことのある人の口からきくことは、とても貴重なことです。その一つ一つの言葉には、とても重みがあり、本当に苦しい出来事だということが感じられました。

また、苦しい思いをしたのは、71年前だけではないということも、今回のお話をきいて改めて感じました。今では、とても平和になった日本ですが、71年前の原爆で被爆した方は、いつ死ぬか、病気になってしまうのかわからない状

況で生きているのです。これは、爆弾をかかえて生きていることと同じことです。家族・友人をなくした方は、71年間、毎日忘れることなく苦しみ続けて生きています。戦争は、戦争をやっていた時だけがつらかったのではないと思えました。戦争を体験した方々は、今でも、日々つらい思いをして生きています。戦争は、71年たった今でも人を傷つけているととてもおそろしいものだと思います。その悲しい思い出も被爆者である永野さんは本当は思い出したくないと思います。私達に話してくれるということは、原爆が落ちた時の様子や自分の気持ちを具体的に思い出さなければなりません。そのようなことは、本当につらいと思えます。ですが、そこまでしてでも、私達に語ってくれているのは、戦争は二度としてほしくないと心から願っているからだと感じました。逆に戦争が恐ろしいものでなければ、つらい思いをしてまで話してくれないと思えます。私は、そんな思いをしてまで、若い世代へと語りついでくれている、永野さんのような方の思いをきちんと伝え、よく考えていかなければならないと思えました。

2日目の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では平和へのちかいや長崎平和宣言、合唱などを聞き、平和のありがたさを強く感じました。平和への思いを聞きとても共感しました。

資料館の近くにある、平和公園には外国からの16個のモニュメントがあります。世界中で平和への強い思いがあるということを感じました。

また、長崎原爆資料館では、たくさんの展示物を見ました。当時の様子を物語ってくれる物がたくさんありました。一瞬の光で残った木の枝のかげのあとやけがをした人の写真を見ました。原爆の破壊力は、計り知れない物だったと思えました。また、焼け野原になった長崎に、人が焼け死んでいる写真を見て、手がふるえました。私は、よく写真を見ることはできませんでしたが、当時起こったことをしっかりと受けとめ、目に焼きつけました。あまりの衝撃で、言葉が出なく、本当に日本で起きたことだとは信じられませんでした。私が、一番印象的だったのは、被爆された方が言った「アメリカはにくくない。戦争がにくいんだ」という言葉です。初めに聞いた時は、意味がよくわかりませんでした。ですが、後から気づきました。戦争は、人が人を殺してしまう恐ろしい

ものです。アメリカも本当は、人を殺したかったのではありません。戦争がこのような悲しい結末をつくったのだと思います。戦争というものは、人の心までもうばってしまう、とてもにくいものだと言いたかったのではないかと私は考えました。

夜の稲佐山の夜景はとてもきれいで、71年前の様子が想像できないくらいでした。日本はとても平和になったのだと思いました。この平和な日本を、こわさないようにしていきたいです。

私は、今回の体験を通して、まだ知らないこともたくさんありますが、今までよりも、戦争について知ることができました。ですが、知っていただけでおわりにせず、しっかりと受けとめ核兵器のない平和な世の中を私たちの手でつくりあげていかないといけないと心から思いました。

## 平和の発信に向けて



湖北中学校 2年 早坂 弘宇

今回の長崎派遣では、我孫子では感じるできないことを、たくさん学ぶことができました。

1日目の青少年ピースフォーラムでの永野悦子さんのお話しでは、勉強もできずに毎日働き、さらに弟と妹の死を自分のせいだと責任を感じながら生きてきたとのこと、とてもかわいそうだと思いました。それに、体には紫色の斑点が出てきたり、髪の毛が抜け落ちたりする原爆症で亡くなった永野さんのお母さんが、どれほど苦しい思いをしたのか自分では感じきれないことだと思いました。

フィールドワークでは山王神社コースの見学に行きました。町中にある原爆

の被害にあった建物の中で、特に印象に残ったものは、二の鳥居（一本柱鳥居）です。秒速 200 メートルにもなる原爆の爆風が当たった片方だけが、吹き飛ばされてしまったことに驚きました。さらに、強い熱線によって奉納者の名前が消えてしまったことから、熱線の威力がどれほど強かったのかを目と肌で感じることができました。

2日目の千羽鶴奉納では、我孫子市の平和に対する思いを鶴に込めて、原爆犠牲者の方々に、届けることができました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、戦後 71 年がたち、今年の前爆死没者名簿記名された我孫子市原爆被爆者の会第 3 代会長の久保明次さんや原爆により亡くなった方、そして今も原爆の後遺症で苦しんでいる方になにができるかを考えました。僕は久保さんの思い、そして犠牲になった人々の死を無駄にしないように、これからもっと平和の大切さをいろいろな機会を通じて伝えていきたいと心に誓いました。今の僕たちができることは、今回の長崎派遣で学んだことを、より多くの人、広い世代、広い地域に伝えていくことだと思いました。71 年前の恐ろしい出来事を二度と繰り返さないように、戦争、原爆の恐ろしさを後世に伝えていきたいです。

青少年ピースフォーラム平和学習では、地雷などの武器がまだ残っている地域に住む幼い子どもは、どのような気持ちなのかを考えました。実際には分からないけれど、きっと安全なところに行きたいのだろうと思いました。僕は、今自分の好きなことができたり、不自由のない生活が送れたりすることがどれほど幸せなのかを改めて実感しました。毎日が恐怖に囲まれながらも必死に生きようとしている人たちに何かしてあげたいと思いました。募金やリユース、リサイクルなどのちょっとした行動によって、救える命が増えるように、これからもっと協力していきたいです。

国立長崎原爆死没者追悼祈念館と原爆資料館の見学では、長崎に落とされたプルトニウム型原爆（ファットマン）の内部構造を学び、その爆風、熱線そして放射能の威力が様々な展示品からも感じ取ることができました。展示品の中には、爆風によって折れ曲がってしまったとても太い鉄骨、熱線によって一瞬にして表面が溶けてしまったガラス瓶や瓦、放射能によって引き起こされた原

爆症の被害など、とても生々しく伝わってくるものが、たくさんありました。

稲佐山の夜景の見学では、71年前に焼け野原となっていた長崎の町が、とてもきれいな夜景を生み出していて、感動しました。この71年間で復興に向かって努力してきた人たちの気持ちと努力が景色に表れていたと思いました。

3日目のグラバー園と大浦天主堂の見学では、1つ1つの建物や場所にたくさん歴史があり、その時代の人々の生活や文化、知恵などを知ることができました。特に姿を映せない鏡は、室内を明るくするために外から入ってきた光を鏡に反射させるという知恵を使っていました。そのため、天井の近くに鏡を付けたことにより、姿を映せない鏡になったそうです。僕は実際に見て、本当に姿が見えず計算されたところにしっかりと取り付けられてあることにとても驚きました。

この2泊3日の長崎派遣で、戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさを改めて実感しました。戦争や原爆により苦しみながら亡くなっていった被爆者の気持ちを原爆資料館や永野悦子さんのお話から感じることができました。戦争に良いところは1つもありません。人間同士が心と体を傷つけあい、苦しみを生み出し、お互いに幸せを奪うものです。戦争は絶対にだめです。戦争は、とても憎く、絶対に繰り返してはいけないことだと強く感じました。

71年前に広島と長崎で起こった事実と原爆によって亡くなった方々の魂など、学んだことを今後の生活に生かし、我孫子から平和の大切さを伝えていきたいです。そして、僕は今ある幸せを大切にします。

## 原爆の恐ろしさ



湖北中学校 2年 松澤 玲奈

私は長崎に行って感じたことが沢山あります。実際に行き、目で見えて感じた事や、聞いて感じたことなどを一人でも多くの人に伝えられたらと思います。

1日目。まず私は被爆者の話を聞きました。そこでは、原爆が落ちたのはほんの一瞬の出来事、雷の何千倍もの光、耳は鼓膜が破れるほどの大きな音、地上は約3000度～4000度で想像が出来ないほどのあつさだったと話をしていました。私は、実際原爆とは関わっていないので、具体的にはわかりませんが、話しを聞いていて原爆の恐ろしさはとても伝わりました。最後に「戦争は絶対にしてはいけない。戦争は、友人、家族など失うだけ。戦争のない平和な世界を皆さんで作ってほしい」と語っていました。私はその言葉が強く心に響きました。

次に平和公園に行きました。そこでは、平和の泉や原爆落下中心地碑などを見ました。その中でも、平和祈念像が印象に残りました。像一つ一つには意味があり、右手は原爆の恐ろしさ、左手は平和を祈る、軽く閉じた目は冥福を祈るという意味が込められています。他にも爆風で遺壁がずれていたり、被爆当時の地層には、お茶碗などが見えました。原爆落下中心地碑には毎年原爆で亡くなった人の名簿などが入っていました。一つ一つを見ていくうちに被爆時の様子、戦争の惨さが伝わってきました。

2日目。平和祈念式典に参列しました。そこでは、平和宣言、平和への誓いなどを聞きました。一言一言がとても心に残り、平和を祈る気持ちなども伝わりました。被爆者の合唱がありました。平和への祈り、また戦争はいけない、原爆は恐ろしい、私達のような被爆者はもう二度とつぐらないうで、という気持ちがとても伝わりました。私はこの式典で本当に戦争はいけないと、改めて感じました。

原爆資料館では、被爆当時のガラスや、かわらなどがあり、ガラスはとけ他のガラスとくっついていたりとても温度が高いとわかりました。その他にもとても痛々しい写真や、ボロボロに破れた制服などがありました。それを見て私は今どれほど幸せなのか、また平和である喜びを感じました。実際に被爆した瓦や、コンクリートで出来た柱に触ってみました。そしたら被爆したところは、ツルツルしていて被爆していないところはザラザラしていたりと全然違っていました。

また、原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。入る前にまず、原爆が落ちてすぐの写真と、今現在の様子を見ました。その後、ふりそでの少女の像を見ました。祈念館に入ってから、亡くなった人の名簿が棚に納められていました。名簿棚の方向は原爆落下中心地です。この建物の中には、沢山の水盤がありました。それは、原爆当時はとても喉が乾いたが、放射線を浴びた水しかなく、飲んだら死んでしまうので飲めなくて、苦しんで亡くなった被爆者の為に水を置いているそうです。

その後夜景を見に稲佐山に行きました。とても綺麗でした。原爆が落ち焼け野原になってしまってから71年たち、人の手でこれまでも美しい町を作り上げこうして夜景を見れてとても感動しました。

3日目は、グラバー園と大浦天主堂に行きました。グラバー園では、最初に大きな鯉を見ました。その後に、グラバー住宅を見ました。グラバー住宅の周りにはとても綺麗な花壇がありました。また、グラバー住宅から見る景色はとても綺麗でした。

次に大浦天主堂に行きました。とても大きくて美しい建物でした。大浦天主堂物語などを読みました。フューレ神父という人は、最後まであきらめずにこの美しい大浦天主堂を造り上げていてすごいなと思いました。

私はこの3日間とてもよい経験をさせて頂きました。原爆について知り、平和について考え、派遣を終えて私は心から平和である喜び、また世界中が平和になるようお願いしたいと強く思いました。でもまだ、世界のどこかで戦争は絶えません。多くの罪のない人たちが今この瞬間にも亡くなっている事を思うと心が痛いです。今私に出来る事は、募金活動に積極的に参加したり、ボランティ

アなどをやることです。私にとってこの3日間はとても貴重な3日間になりました。

## 本当の戦争、本当の原爆



布佐中学校 2年 藤野 浩明

私達、長崎派遣団は、1日目にピースフォーラムに参加させて頂きました。ピースフォーラムには、北海道から沖縄まで40の市から集まった小中学生が参加しました。多くの人に参加したので、人それぞれの意見があり、とても勉強になりました。ピースフォーラムは、まず永野悦子さんの被爆体験講話で始まりました。永野さんのお話で、疎開していた妹と弟を無理に長崎に連れて帰ったら、そこで被爆し、亡くなってしまったということが印象に残っています。私がもしその立場だったら同じことをするんじゃないかと思いました。子どもたちを、生きている時も引き裂く原爆による実際の辛さを初めて知ったと思います。この後は、コース別に分かれ、フィールドワークなどを行いました。私は、浦上天主堂コースで、フィールドワークに参加しました。他の市の人や青少年ピースボランティアという方々で行いました。とても暑かったのですが、ピースボランティアの方々が、こまめに休憩をとって下さったり、体調を気にかけて下さったりしてくれたので、集中して取り組むことが出来ました。まず、浦上天主堂に行きました。今は再建されていますが、当時は爆風で鐘が落ちるなど大変な状況だったそうです。また、被爆マリア像という顔だけになってしまった像を見ました。原爆の威力や恐ろしさを実感しました。浦上天主堂から落ちた鐘と遺壁を見て、こんな重い物さえ壊れてしまうので、人間にとっては一たまりもないものだと思います。あと、原爆落下中心地碑、当

時の地層、下の川を見ました。下の川には当時水を求めて沢山の人に来て、沢山の人亡くなったそうです。その川には今、平和を願う沢山の子ども絵が貼ってありました。少しでも出来ることをやって、平和を訴えようとしていて、凄いなと思いました。また、この長崎派遣で学ぶことを、しっかりと多くの人に伝えていきたいと思いました。1日目は、夜に交流会も行いました。

2日目は、まず長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。開式の前と閉式の前に、被爆者の方だけでつくる「ひまわり」という合唱団が5曲歌われました。私は、これを聴いた時、被爆者の方々の本当に強く、切実な平和を願う気持ちを感じました。一つ一つの歌の詩にも、戦争や原爆がどれくらい酷く、悲惨で、忌まわしいものなのかということや平和の尊さが詰まっていた。式典では、平和宣言や平和への誓い、メッセージが読みました。その中で、「長崎を最後の被爆地に」という言葉や、原爆についてあまり知らない、若い世代や外国の方に実情を知ってほしいという言葉が何度も口にされました。これらは、今の被爆者や平和を願う人々の一番の願いだと思います。これを実現するには、私達若い世代で、私達を含めた戦争や原爆について少しでも知っている人が先頭に立ち、活動していくことがまず必要ではないかと思いました。式典が始まる前に、千羽鶴を奉納しましたが、そういったことでも、平和を祈ること、考えることが出来ると思います。ですので、身近に出来ることから始めることが大切だと思います。午後は、意見交換会を行いました。ここでは、現在戦争などで大変な生活を強いられている子どもたちのことや、ある中学校のケンカを例に、身近な争いについて考えました。人それぞれの意見があり、自分では気付けないような着眼点からの意見もあったので、とても勉強になったと思います。現在私達があたりまえのように三食食べたり学校に行ったりしているのに、世界のどこかではあたりまえではないと思うと、幸せを実感しました。世界平和をより強く望むようになりました。最後には、参加者全員の争いをしない為の目標を書いた鳩で世界地図を作りました。皆で一つのものを作り上げた達成感と、戦争や核兵器のない世界になってほしいと感じました。この後は、我孫子のみで原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。原爆のことや被害の実態、当時の写真や動画など詳しく理解出来

ました。また、ほんの少しでしたが、被爆者の手記を読んで頂きました。昨日元気だったのに今日起きたら亡くなっていたという話を聴き、本当に残酷で辛かっただろうと胸が締めつけられる思いでした。夜は、稲佐山から夜景を見ました。71年前、ここは焼け野原だったと考えると、長崎の方々の努力を感じました。3日目に訪れたグラバー園と大浦天主堂でも同じことを思いました。また、文化も昔から受け継ぎ今へ繋げているのだと感じました。

私は長崎へ行かせて頂き、戦争や原爆の本当の姿、大変さ、酷さを知りました。それは、現地でないとは絶対に感じられないことです。この貴重な体験や感想を、しっかりと伝えていきたいと思います。引率して下さった方々や、派遣団のメンバーなどに感謝します。

## 派遣を通して



布佐中学校 2年 石嶋 心愛

私は3日間、とても貴重な体験をさせて頂きました。それは思った以上に深いものとなりました。1日目からとてもたくさん学ぶことが出来ました。特に永野悦子さんの体験した、被爆体験講話です。この話でとても核の恐ろしさを改めて感じました。永野さんは当時16歳で学徒動員として勤務中に被爆されました。永野さんには当時13歳の妹と9歳の弟がいましたが、原爆により、命を落としました。ですが、永野さんはずっと自分を責め続けていました。「自分が連れて帰って来なければ良かった。」と頭から離れないそうです。それは、疎開で鹿児島県へ移っていた妹・弟を無理矢理連れて来てしまったことだと永野さんはおっしゃっていました。私はこの講話を聞いて、とても心が痛くなりました。元々、この戦争さえおこなっていなければ、永野さんのご家族は元気であ

りました。そして誰一人の犠牲など出なかったと、とても辛くなりました。永野さんは「平和な世の中を。戦争をしたら必ず身内や大切な家族・人を失うことになる。そして悲しむ。」そうおっしゃっていました。その時、本当に辛くそしてとても怖くなりました。戦争を体験していない人にとっては到底想像しきれないことと思いました。体験した人の心の傷は一生消えることはないですし、私達にはその恐ろしさ分かりきることは出来ないことです。ですが体験者から実話を聞き、その恐ろしさを後世に伝えることは出来ます。いや、もうその責任は託されつつあります。語り部さんの団体は年々減っていく中で同時に戦争があったという確かな認識が薄れている世の中を若い世代がつないでいくことが本当に重要な事だということを強く感じました。青少年フィールドワークでは、被爆クスノキがとても心に残りました。くすの木は樹齢四百年～五百年と戦前からある、とても古くからある木ですが、その中で強い熱線を浴びても凄まじい生命力がこの木の支えとなりました。今では長崎市民の生きる希望の木として知られ、たくさんの緑が生い茂っていました。一度枯れ木寸前になったくすの木とは思えないほどで圧倒されました。

2日目では、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典の参列と青少年ピースフォーラム意見交流、原爆資料館の見学でした。

「核兵器のない世界へ」を目的として今年は約96カ国と二番目に多い国々が式典に参加していました。とても良いことだと思いました。ですが、恐ろしく、人々の大切なものの全てを壊す核兵器は今も世界に千数百以上あります。保有国が「核兵器のない世界」と言うその日になることを信じ、日本は被爆国として平和を推進していく義務があり、私達一人一人にも訴えていく責任があると思いました。戦争は国同士の喧嘩です。その予防策や解決策を考えた青少年ピースフォーラムの意見交換でした。どうしたら争い事がなくなるのかを考え、意見の共有をしました。一人一人視点が異なり、学んだこともありました。私の意見は、相手の意見を尊重することが最大の予防策なのではないでしょうか。武力を使い、互いを潰し合うのではなく、尊重し合うことが今の世の中には必要だと思います。日本各地からの中学生と交流する機会はとても貴重なことですし、自身の考えの視野を広げるきっかけとなりました。原爆資料館では、た

くさんのことが盛り込まれていました。一番印象的だったのは、熱線のすごさです。3000度～4000度の熱さを想像しきれないです。被爆者は「まるで太陽が落ちてきたようだった。」とおっしゃっていました。資料では、耳や目が無くなっていた人、背中が血だらけ人の写真がその熱さを物語っていました。影だけが残っている写真もあり、凄まじい爆風の威力だということを身にしみて感じ、言葉を無くしました。こんなことまでしなくてはいけなかったのか…。と思いました。アメリカ国民も日本国民も「戦争をしたい」と思っていた人はいないはずですが。「お国のため」と戦っていたと思うと、心が痛くなりました。私にはどうも出来ません。戦争はそんな罪のない人々を犠牲にした、とても怖い行為です。私は絶対に反対です。今、戦争が出来るように憲法改正に力を入れようとしています。私は反対です。日本は1945年に終戦を迎え、71年間、平和を築いてきました。唯一の被爆国の私たちが発信していかななくては、一生戦争や紛争は無くなることはないと思います。実際に体験した方々は年々減り、核兵器の恐ろしさや、戦争が本当にあったという意識や知識が薄れてきています。私はこれからもたくさんの実体験や講話を聞いて、後世に伝えていくよう、今回の派遣などを通して努めていきたいです。

## 原爆を知って



湖北台中学校 2年 松下 大希

僕達は3日間長崎に行って、原爆の恐ろしさについて、学んできました。

1日目の最初は、永野悦子さんの被爆体験講話を聞きました。永野さんが原爆を体験したのは10代なので、記憶にハッキリと残っていると思います。だから、思い出すたびに、辛い思いをしているのがよくわかりました。永野さんは、

原爆により家族や自分の故郷も失ってしまったので、人一倍原爆の恐ろしさがわかっているのだと思いました。僕はこれまでに2回程、原爆体験話を聞いた事はありませんが、今回の永野さんの体験話は、原爆の恐ろしさや、被爆してしまっ時の心情など、より深く知ることができました。でも、原爆体験者が減っている事については、危機感を感じました。次の世代へと原爆の恐ろしさを伝えるために、自分達が原爆について学ばないと、と思いました。

次にABCでフィールドワークをしました。僕はBチーム、浦上天主堂コースでした。まず、浦上天主堂に行きました。予想以上の大きさにビックリしました。左右の像は原爆をくらった物らしく、原爆の熱線、爆風のすごさがよく伝わってきました。再建前の浦上天主堂はレンガ造りだったらしく、こんなに大きい建物をレンガでつくったのはとてもすごいと思いました。室内には、原爆の影響により顔だけになってしまった像もあり、普通じゃない壊れ方で原爆は恐ろしい、と感じました。次に鐘楼ドームに行きました。これはもともと浦上天主堂の一部だったらしいのですが、原爆の爆風によりここまでとばされたらしいのです。聞いた時は全く想像が付きませんでした。風だけで建物の一部が崩れてしまうほどの風だったことがよくわかりました。次は大本命の原爆落下中心地碑に行きました。71年前、この上空約500メートルで原爆が爆発して長崎が崩壊したと考えると、とても怖くなりました。黒い箱の中に、原爆の影響により亡くなった人の名前が入っているらしく、今年で17万人を超えたということです。原爆の威力がどれほどすさまじいものか、よくわかりました。次に浦上天主堂遺壁に行きました。これは浦上天主堂の一部で、他の部分は原爆により壊れてしまい、これだけが残りました。まさに奇跡だと思いました。爆風により、ところどころずれていました。この遺壁は、原爆を知らない人でも一目見れば原爆の威力のすさまじさが伝わってくると思います。次に、下の川に行きました。この下の川は、被爆した人が水を求めてやってきたところなのです。だから、この川は死体がゴロゴロあったということです。それほど原爆が人々にあたえてしまった被害は大きいということがわかりました。悲しい、という言葉でした。被爆当時の下の川の写真を見ると周りの木は立っていました。それは、原爆が爆発したのは上空なので、爆風は上から下へとあたったた

め、木が倒れなかったのです。写真は原爆を物語っていました、次に、被爆当時の地層を見に行きました。ここは、被爆当時の人々の生活がそのまま残っていました。お皿やコップなどがところどころに見られました。まだ、人の骨やコップなどが埋まっている可能性があるらしいです。このフィールドワークでは原爆についてや原爆の威力を知ることができました。

この後は、ピースフォーラム交流会に行きました。班に分かれて、食事とともに、フィールドワークで学んだ事について意見交換などをしました。詳しい事までは意見交換できませんでした。でも、明日の平和学習への準備はできたと思います。

2日目は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。遺族の方や総理大臣などの平和への思いを聞くことができました。普通は座れない所に座れたり、色々と、貴重な体験となりました。この後はピースフォーラム平和学習に参加しました。今の世界で起きている事について学びました。核の危険さ、世界平和はまだ遠い、という事をととても思いました。世界平和を実現させるためには、一人ひとりがささいな争い事をやめなければいけないと思いました。次に、原爆資料館に行きました。ここでは、印象に深く残る展示物ばかりでした。ここで一番原爆の恐ろしさ学べました。この日の夜に行った稲佐山、次の日に行ったグラバー園では、原爆の日から今までの回復力がわかりました。ここまで復興してきたのは、頑張った証だと思います。

この長崎の3日間は、小学校、中学校では習えないような事を学ぶことができました。3日間で、前よりも平和を大切にする気持ちになれたと思います。僕は核なき世界や、世界平和を実現させるにはどうすれば良いかを考えていこうと思いました。原爆という恐ろしい兵器を世に出さないためにも、次の世代へと原爆の恐ろしさを伝えていきたいと思えます。

## 長崎派遣を通して



湖北台中学校 2年 中村 咲希

私は、今回の長崎派遣で長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列や、青少年ピースフォーラム平和学習への参加など、他ではめったに体験することのできない貴重な機会をいただきました。

1日目は、青少年ピースフォーラムに参加し、当時原爆の被害にあった方の被爆体験講話を聞いたり、フィールドワークで実際に熱線や爆風の被害にあった建物などを見てまわったりしました。

被爆体験講話では、原爆が爆発した瞬間の様子やその後の生活、当時の被爆者の方の気持ちを知ることができました。全身火傷を負った人もいたし、血がダラダラたれている人もいたということは前から知っていましたが全身に傷を負いボロボロになった家族を見て「誰だか全くわからなかった」「名札を見て初めて弟だということがわかった」という話を聞いて、原爆によって人々がどのくらい悲惨なめにあったのかを、自分自身はわかっているようで全然わかっていなかったのだということを知りました。また、「自分で自分の火葬をしなければいけない」ということにも驚きました。家族を亡くした人は、「私も一緒にしんでしまいたい」と思うほど、ショックを受けているのに、自分で自分の家族を焼かなければいけないのは、本当にかわいそうだと思います。自分だったら、火葬するどころか見ることも絶対にできないと思うので、言われるままに大切な人を焼いて、その骨を茶碗に入れることができるのは、現代の人よりも心が強い昔の人だけだと思います。話の最後に「みんなの手で平和を守り続けてほしい」と被爆者の方がおっしゃっていたので、まずは周りの友達と仲良くすることが今の自分にもできる大切なことだと感じました。

フィールドワークでは、一本だけの状態になった「一本柱鳥居」や爆風によって大きく傾いてしまった「旧正門門柱」がありました。その中でも特に印象

に残ったのは「被爆クスノキ」です。原爆当時、爆風や熱線によって枝葉が吹き飛ばされ木肌も焼かれ、一時は枯死寸前と思われましたが、樹齢五百年の大クスノキは自らの力で生き延び、徐々に復興してきました。私は、植物であるクスノキの生命力の強さにとても驚きました。今もクスノキの治療は続いているようで、長崎市では補助金を出したり、寄付金を募ったりしているようです。これを知り、被爆クスノキを大切にする人々の熱い気持ちが伝わってきました。

2日目は、平和祈念式典・ピースフォーラム平和学習への参加、原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学をしました。平和祈念式典では、長崎市長による長崎平和宣言や、被爆者代表の平和への誓い、被爆者合唱などが行われました。そのとき、当時原爆を体験した方々の「もう二度と同じことを繰り返さないでほしい」「日本だけでなく世界中が平和になってほしい」という思いを感じることができました。また、現在被爆体験者の平均年齢が80歳を超え、語り部などで原爆当時のことを伝える人が減ってきてしまっています。ですから、私達のような学生もしっかりと戦争のことを知り、まだ戦争のことをよく知らない人々に伝え、みんなで平和を守り続けていかなければいけないと思いました。

ピースフォーラム平和学習では、世界の子もたちの気持ちを考えたり、日常生活での身近な対立をなくすためにどうしたら良いのかを話し合ったりしました。中には、自分とは全く違う貧しい環境で暮らしている女の子や、幼いころから将来に大きな不安を抱えながら生活している男の子がいました。そのようなことは、過去にも何度か聞いたことがありましたが、改めて考えてみると自分は本当に幸せなのだと感じ、毎日当たり前のようにできている自分の生活にもっと感謝しなければならないと思いました。身近な対立について考えたときは、相手の意見を尊重することも大切だけど、自分の考えをはっきりと伝えることも大事なのだと思いました。

原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館では、当時どんな被害にあってどんな状態になってしまったのかなどを知ることができました。特に印象に残っているのは、原爆資料館で最後に見た「焼き場に立つ少年」です。写真の中の少年は当時10歳ほどだったのだと思われていますが、少年は死んだ弟を

背負い涙をこらえて裸足で焼き場に立っています。私は、家族を亡くした人の大半はその場で泣き崩れるのではないかと思っていたので、少年の意志の強さに驚きました。

私は、今回長崎に派遣されたことで、これからも平和を守り続けるには私達のような若い世代の人々の力が必要なのだということを実感することができました。ですから、今回学んだことをいつまでも忘れずに、次の世代へと受け継いでもらえるようにしたいです。

## 聴くこと、見る場所が変わる場所



久寺家中学校 2年 齊藤 寛人

私は、この長崎派遣の前と後で、感じ方に変化がありました。例を出さなら、飛行機の中でのJAL名人会を聴いて思った事の変化がわかりやすいと思います。行きの飛行機では、70歳以上の方が、漫談をされていらっしゃるのを聞いて、やはりとても上手いなど、そのことしか思っていませんでした。しかし、帰りの飛行機では、この方々は、あの原爆が落とされた時に、どこで何を思って生きていたのだらうと思うようになりました。この感情の変化は、長崎で、見て、聴いて、感じたことによって起こったものです。その変化がまず初めに起こったのは、青少年ピースフォーラムで永野悦子さんの被爆体験講話を聴いた時の事です。永野さんは16歳の時に被爆されました。この約5ヶ月前に、永野さんは、自分のさびしさ故に、避難先の鹿児島から、周りの反対を押しきって、妹と弟を、長崎に連れて帰ってきていました。そして、あの日。永野さんが、学徒動員として、勤務しているときでした。「ピッカ、ドーン。」と、まばゆい光と熱と、すさまじい爆風により、長崎は一瞬にして破壊されてしまいました。この後、永野さんは、自宅に向かう途中でお父さんと再会します。どれほどに安心をしたのでしょうか。あの恐怖から、どれほどに抜け出したかった

のでしょう。私は考えました。もし、自分だったなら、と。もし自分だったなら、命の危険をおかし、家族の死体を見るかもしれない可能性がある中、自分の父親と再会したら、と。それはもう言葉ではきっと表すことのできない気持ちになるだろうと思いました。その後、永野さんは、母、妹、弟と再会を果たしますが、弟は、変わり果てた姿でした。その直後、弟は亡くなりました。悲しい別れだったと思います。1ヶ月後、妹も亡くなり、母は口をきいてくれなくなりました。私がこの場に生きていたら、なぜ口をきいてくれないのかと思うことでしょう。それは永野さんも、同じでした。永野さんは、その答えにたどりつくと同時に、深い悲しみに襲われました。そうです。永野さんが妹と弟を連れてきたがために、2人は死んでしまったのです。永野さんはここまで話すとても悲しい目をしていました。その後、永野さんは、平和についてお話をされました。そこから、私は見る景色、聴く音が、すべて今までとは違うように感じました。その後私は、山王神社に向けて出発し、その道で見る様々なものに当時の様子を感じました。その日の夜の交流会では、楽しく皆さんと交流が出来ました。

2日目。朝。会場に行くまでの中で少しずつ、気持ちをつくることができました。そして、会場につくとすでにそこには多くの折り鶴が。みんなの気持ちは一緒なのだな、と思いました。席につき待っていると、歌が聞こえてきました。そして、式典は始まりました。平和への思いを、次々に人は語りました。今年の名簿には我孫子市原爆被爆者の会、第三代会長の方の名前も記載されていました。私は、悲しさがふっとこみあげてきました。亡くなった方や残された方の思いが伝わってきて、とても悲しくなったのです。私は祈りました。きっと他の皆さんも祈っていたと思います。式典も終わり私達は、青少年ピースフォーラム平和学習に参加しました。そこでは、まだ幼いのに、不自由な生活をしなければならない、子どものキモチについて考えました。「家族がいるだけ幸せ」、「子どもに申し訳ない」など様々な意見が出ました。こうしてみると私達がどれほどに幸せなのかがわかりました。その後、国立長崎原爆死没者追悼祈念館、原爆資料館に行きました。そこで顔の半分の皮膚が焼けてしまった人や、11時2分で止まった時計を見ました。私はとても恐かったです。これほど

の人が傷つけられたのは知っていましたが実際に目にすると、かなり衝撃を受けました。ただ、そこから絶対に戦争はしていけないと強く思いました。次に稲佐山の夜景を見に行きました。原爆によって破壊された町がここまで復興したと思うと、様々な人の苦勞が感じられました。

3日目。グラバー園からも、長崎を見渡すことができ、やはり人々の苦勞が感じられました。次は大浦天主堂だったのですが、自分の忘れものによっていけませんでしたが、行った人の顔がとても引きしまっていたということは、さぞかしすごいものがあったのだろうと思いました。我孫子に着いて長崎の派遣は終わってしまいましたが、まだ自分にはできることが多くあるので、それらを一一つやって、平和の大切さを伝えていきたいです。

## 平和になるには



久寺家中学校 2年 佐口 未来

仲良くすることが一番。私が長崎に行って思ったことです。

1945年8月9日11時2分、長崎市に原子爆弾ファットマンが投下されました。その瞬間、熱線や爆風によって亡くなった方や、その後何年も何十年も苦しみながら亡くなった方がいて、これまでに172,230人の方がなくなったそうです。そして、未だに原爆症で苦しみ続けている人がいます。原子爆弾が投下されたときの長崎は、家が燃え、遺体が転がり、一瞬にして人間の世界とは思えない光景になったそうです。

そんな中を生き延びた永野悦子さんの話が、今回の旅で私の心にとっても印象に残りました。永野さんは16歳の時に被爆し、妹と弟を亡くされました。原子爆弾投下直前に永野さんは、妹と弟を疎開先から無理矢理長崎に連れ戻したそ

うです。あのとき自分が連れ戻していなければと、永野さんは今でも罪悪感が残っているそうです。永野さんのように、自身も被害者なのに、加害者だと悔やんでいる人がたくさんいるのです。永野さんは話の終わりに「戦争は肉親を奪います。戦争はいりません。争いをなくすにはみんなと仲良くしてください。」とおっしゃっていました。その言葉を聞いて私は思いました。正直、今まで私一人の力では何も変わらないと思っていました。けれど、みんながみんな仲良くすれば、その輪が広がり、世界が一つになり、戦争のない平和な世界になるのではと思うようになりました。原子爆弾の悲惨さを知り、戦争は不幸しかもたらさないことを多くの人に知ってほしいと思うようになりました。

現在、永野さんのように被爆を経験した方や、実際の原子爆弾による被害を見た方は高齢になっており、平均年齢が 80 歳を超えるようになってきました。だからたくさんの方が言っているように、まだ生の声が聞ける私たちが戦争や原子爆弾について学び、次の世代に原子爆弾の恐ろしさを伝え、その輪を広げていかなければと思うのです。

また、私は長崎に派遣されて疑問に思ったことがあります。それは、アメリカ合衆国がまだ核兵器を持ち続けていることに対してです。今年 5 月 27 日、オバマ大統領が現職アメリカ大統領としては初めて、被爆地広島を訪問しました。そこでオバマ大統領は核廃絶の目標について語っていました。広島や長崎で原子爆弾によって家族を失った方、未だに苦しんでいる方は、どんな気持ちでこの行動を見たのでしょうか。単純に喜べるのでしょうか。未だアメリカ合衆国は、7,000 個も原子爆弾を保有しています。もちろん原子爆弾をすぐに捨てることは無理なこと、アメリカ大統領が被爆地を訪れたことは平和への大きな一歩だと思いますが、もっと世界を平和にするためにできるだけ早く、原子爆弾を捨ててほしいのです。それが実現しない限り、広島や長崎、日本人の多くは安心できません。悲しみが消えることはないのです。

もう 1 つ私が思ったことがあります。それは原爆資料館に行ったときに思ったことです。原爆資料館で私は一枚の写真を見ました。まだ一歳くらいの赤ちゃんとそのお母さんの遺体の写真です。赤ちゃんはまだ学校に行ったことがありません。まだ美味しいものを食べたことも、楽しいことをしたこともなかつ

たかかもしれません。それくらい小さな赤ちゃんの遺体の写真を見て、私は現在の自分がいかに幸せなのか気付かされました。ご飯を食べて、寝る。それがとてつもなく平和な日常であることに気づきました。だからこの私が過ごしている平和を絶やさないよう、戦争の悲惨さを伝えて、輪を広げ、争いがない世界になってほしいです。

長崎に住む人は、子どものころから原子爆弾について学校でも話を聞いたり、平和の大切さを話す機会が多くあるそうです。それは世界で唯一の被爆国のそのままに被爆地であり、原子爆弾の恐ろしさを経験した場所だからです。私たち日本人は、遠い昔の話でなく、遠い国の話ではない、この未だに癒えぬ傷を残した原子爆弾の恐ろしさを広く伝え、核兵器は絶対いらないということを訴え続けなければならないのです。

## 平 和



白山中学校 2年 白杉 快

1945年（昭和20年）8月6日、午前8時15分、広島市の街中心部、細工町の上空590メートルの地点に世界で初めてのウラン原子爆弾が落とされました。

その3日後の8月9日、午前11時2分、今度は長崎県浦上の中心松山町の上空550メートルの一点に一発のプルトニウム原子爆弾が爆裂しました。

長崎に落とされた原爆は、秒速2,000メートルの風圧による巨大なエネルギーとなり、瞬時に地上一切の物体を押し潰し、粉碎し吹き飛ばしました。爆心に発生した真空はこの全てを再び空中高く吸い上げ、投げ落としました。そして9,000度という高熱が全てを焼き焦がし、さらに灼熱の弾体破片は火の玉の雨と降ってたちまち一面猛火になったそうです。

今年8月、僕は我孫子市平和事業の中学生長崎派遣メンバー12名の中の1人として長崎を訪れ、9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加させていただきました。また同時に行われた『青少年ピースフォーラム』へも参加して、全国から集まった中学・高校生の人たちと交流することができました。初めて訪れた長崎は、想像していたものとは全く違い、71年前の戦争の被害が見た目からは感じられない平和な街でした。世界遺産のグラバー邸や、原爆で建物が全て倒壊した大浦天主堂もきれいに建て直されて、戦争の傷跡はわからないほどでした。街全体が戦争のつらさから立ち直ろうとして、元の美しい長崎を取り戻すために頑張ったからだと思います。それでも、戦争を体験した人々の心から、戦争は消えていません。

今回のピースフォーラムでは、戦争の語り部の永野悦子さんの話を直接聞くという貴重な体験が出来ました。原爆が落とされた時、16才だった永野さんには、家族と離れて疎開していた弟と妹がいました。8月9日の少し前に母親の反対を押し切り2人を長崎に呼び戻し、その直後に2人が原爆で亡くなってしまったため、永野さんは弟と妹のことを「自分が殺してしまった」と後悔していました。永野さんは、「自分も被害者であるのに、自分のせいで兄弟が亡くなったことで自分が加害者であるかのように感じる。」とおっしゃっていました。これも戦争が生んだ悲しみだと思います。

両親や子どもや兄弟をこの一発の原爆で亡くした人にとって、原爆は自分が死ぬまで決して忘れられないものだと思います。原爆が落ちた一瞬で長崎では7万4千人の人が亡くなっています。そしてその後、原爆の後遺症で死没された人は10万人ほどだと言われています。広島でも11万8千人以上の方が亡くなっています。僕の住んでいる我孫子市の人口は13万人なので、原爆一つで我孫子市全体がなくなってしまったくらいの被害ということになります。そんな威力のある原爆（核兵器）が今なお世界に15,700発もあるというのは。はたして原爆は本当に必要とされているのでしょうか。

さらに今、世界は、この広島と長崎に落とされた、ウランとプルトニウムという原爆の材料と同じものを、原子力発電所内で製造してエネルギーを作り出すという仕組みを作りました。世界で唯一、原子爆弾の被害にあった、この日

本の国内様々な場所にも原子力発電所が建っています。そして2011年、東日本大震災の地震と津波で福島原発は崩壊しました。広島や長崎の爆弾と同じ放射性物質を自分たちの手で国内に撒き散らしてしまったのではないかと思います。原爆と同じ物質から得られるエネルギーで僕たちの生活する電力がまかなわれている、これで生活が便利になって幸福になったと喜んではいけないような気がします。

広島と長崎に原爆が落とされてから今年で71年経ちました。直接に戦争を体験した人が高齢化してどんどん少なくなっています。今回、直接には戦争を知らない僕たちに、この先も二度と世界中に原爆が落とされる戦争がおこらないようにするために、どうしたらいいかをじっくり考えることができました。原爆を経験した世界唯一の国として、原爆の壮絶さ、悲惨さを、これから生まれてくる人たちや、原爆を経験していない世界の人々に語り継がなければなりません。それは広島と長崎に住んでいる人たちだけがすることではなく、この我孫子に住んでいる僕たちもしなくてはならないことだと思います。我孫子市は昭和60年に、いかなる核兵器に対してもその廃絶を求める「平和都市宣言」をしています。僕たちには、これから先世界のどこにも核兵器が使われないことを見張っていくという義務があるのだと思います。

## 長崎が教えてくれた事



白山中学校 2年 高城 華織

カステラ、皿うどん、びわ、出島、風光明媚な長崎…これが私の長崎のイメージでした。

しかし、実際に足を踏み入れた3日間で、私にとっての長崎に被爆地長崎が

大きく心に刻まれました。

事前説明会で見学コースを決める時も、「世界遺産に登録されそうな教会を見てみたいな。」という位の気持ちで、浦上天主堂コースを選びました。

現地に行ってみると、爆風で指が飛ばされた「悲しみの聖母マリア像」、鼻が欠け、熱線によって半分だけ黒い「死と生のヨハネ像」が、悲しみに耐えた姿で、立っていました。私は言葉も出ませんでした。一目見て、爆風の強さを感じました。爆心地から 500 メートルも離れている浦上天主堂の一番上にある 50 トンの鐘楼ドームをも落とす爆風に、ただただ恐ろしさを覚えました。

長崎原爆資料館に入った時は、何とも言い様のない、重い空気を感じました。それは、館内が、原爆を落とされた後の長崎市内と同じ暗さだったからかもしれません。

原爆が投下され、昼間なのに黒い雲がたち込めていた長崎の空の下では、一瞬で黒こげになってしまった人、「熱い、痛い、水。」と泣き叫ぶ人、一瞬にして、何の罪もない人々から幸せな日常を奪っていきました。資料館で見た惨状を写し出した写真や、被爆者の方のお話を聞いて、私はあまりの恐ろしさに鳥肌が立ちました。

核保有国の偉い人にも、原爆資料館に来て、原爆の恐ろしさを肌で感じてほしいと強く思いました。

「戦争は絶対にやってはならない事です。なぜなら、大切な両親、兄弟を失うからです。」

これは、長崎で原爆の語り部として働いていらっしゃる永野悦子さんの言葉です。私にとって忘れる事のできない重い言葉として心に残っています。

私達は、80 度のお湯でやけどしてしまうというのに、被爆された人々は、3,000 から 4,000 度の高温で一瞬で焼かれたそうです。転んで少し擦りむいただけでも痛いのに、原爆で焼かれた肌は、皮膚がただれ、うじがわいていたそうです。原爆によって死んでしまった家族を焼け野原の中で茶毘しなければならぬ悲しみ…。もし、あの日の長崎で起こった事が、今の自分に起こったらと考えると、絶対に耐えられません。

今年 5 月、アメリカの現職大統領として戦後初めて、オバマ大統領が、被爆

地広島を訪問されました。その際も、「核なき世界」を訴えました。そのスピーチ冒頭には、

「71年前の明るく晴れ渡った朝、空から死神が舞い降り、世界は一変しました。閃光と炎の壁がこの街を破壊し、人類が自らを破滅に導く手段を手にしたことがはっきりと示されたのです。」

という、一文がありました。後日、大統領自ら書いた原文が新聞に載っていました。「破滅させる能力」の所に線を引き、「破滅に導く手段」と書き直されていることに私は、目をとめました。細かな言葉のニュアンスまで考えているオバマ大統領の思いやりを感じると共に、まさに原爆は、人の手によって作られ、人の手で落とされ、人間が人間の命を奪うものだというメッセージを受け取りました。

今回、長崎に派遣させて頂いたことで、全世界で、10ヶ国が約2,500個の核を保有していることを知りました。

自国を守る為に核兵器を所有するという考えでは、平和は訪れないと私は思います。全世界の人々が、広島、長崎で起こった原爆が投下された現実を知り、核兵器を手放す勇気を持ってほしいと思います。

長崎平和公園の奥、正面には平和祈念像が長崎の町を見守っていました。

天を指す右手は原爆の脅威、真っすぐに横に伸ばした左手は平和、横にした右足は原爆投下の直後の長崎市の静けさ、立てた左足は救った命、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っているそうです。

1945年8月9日、午前11時2分、原爆投下により、長崎市は全てを失いました。

長崎派遣2日目の夜に見た、稲佐山の夜景の裏側に、一瞬にして焼け野原なってしまった長崎の悲しみと、悲しみを乗り越えて復興させてきた人々の努力と力強さを感じました。

今の私には、大きな事はできませんが、被爆地長崎に行かせて頂き実際に感じた原爆の恐ろしさ、平和の尊さを、周りの人に伝えていきたいと思います。大人になり、母親となっても、次の世代へと伝えていきます。

戦争は、絶対にやってはならない事だと。